

調査団体名	海の博物館((財)東海水産科学協会)		団体代表者名	石原義剛(館長)	
設立年	1953年 (財)東海水産科学協会設立 1971年 同財団を母体に博物館設立 1992年 現在地に移転		団体URL	http://www.umihaku.com/	
活動地域	鳥羽市、三重県沿岸地域、濟州島など		会員数		
取材日	2009.9.11 (10/3再訪問)	レポート作成者	松井賢子 竹峰誠一郎	調査員	松井、竹峰、森
<p><活動内容></p> <p>○博物館展示:①「海に生きる人々…海民(かいみん)」②「船…木造船の世界」③「魚介藻を獲る…漁具と漁法」 ④「海の環境を守る…汚染の現状」の4つのテーマを柱に展示している。</p> <p>○海女文化の保存・継承:博物館でのビデオ上映・展示、写真展、「日本列島“海女さん”大集合～海女フォーラム～」開催など。</p> <p>○特別展・作品展・写真展開催:「熊野灘のクジラ絵図」、「海ごみクリーンコンクール」作品展、写真展「濟州島の海女」など。</p> <p>○体験学習プログラム:「カツオ節削り競争」「藻塩づくり体験」「櫓(ろ)漕ぎ体験」「料理教室」「カキむき体験」など。</p> <p>○ミュージアムショップ、「喫茶あらみ」の運営、「SOS=救え!われらのいのちの海を」運動の本部、など。</p>					
<p><会のモットー(何を大切にしているか)></p> <p>「海民(かいみん)」と呼ばれる漁師さん・船乗り・海女そして海辺に住む人が、海と親しく付き合ってきた歴史と現在、さらに未来を伝えること。</p>					
<p><設立から現在に至るまでに変化したこと></p> <p>○当初:財団は「漁業振興」と「漁村青年教育」を目的に創設。博物館は初代理事長のアイデア。博物館を創設した頃は、漁村社会の転換期で古いものが次々捨てられる時期。宮本常一のアドバイスもあり、日常使われていたモノを集めるようになった。</p> <p>○現在:設立当時は環境という考えはなかったが、おのずと環境や公害に向かった。沿岸の人間はずっと資源を守ることはしてきた。モノが博物館の基本であることに変わらない。海離れをしている小学生に、理屈ではなく、海を体感させることをしている。</p>					
<p><連携している団体・専門家・自治体など></p> <p>鳥羽市、鳥羽市の旅館・ホテル、三重漁連、三重大学、マスコミ各社、全国の研究者、濟州島の海女博物館など</p>					
<p><今までに行った調査・研究></p> <p>○『伊勢湾は豊かな漁場だった』『目で見る 鳥羽・志摩の海女』『海で生きる赤須賀』など。</p> <p>○博物館はモノ集めをする場所で、それを研究者に使ってもらい、自ら研究する場ではないと学芸員には言っている。</p>					
<p><現在直面している課題></p> <p>○財政問題:「海の博物館の救館応援団になってください」と、海の博物館の再生支援募金の訴えを2009年に発表。</p> <p>○モノの置き場と整理:三重県内の海がある市町村の資料を受け入れているが、整理が追いつかない。置き場の確保が大変。</p>					
<p><今後やってみたいこと></p> <p>「海女」を世界遺産無形文化財に登録すること。</p>					
<p><そのためにはどんな情報・人脈が必要か></p> <p>今まで培ってきた情報と人脈がある。</p>					
<p><チームオリジナルの質問></p>					
質問内容:	海の博物館の建物も注目されていると聞きますが…。				
答え:	建物を目当てに来る人もいる。内藤廣さんの作品。環境に配慮した建物にもなっている。年間の光熱費は、通常このくらいの大きさだと3,000から5,000万円かかるが、ここは400万円ですんでいる。空調がない。お客さんから暑いと怒られることもある。津波にも配慮した建物になっている。				

＜その他、伝えたいこと＞

○モノが博物館の基本。モノを集めて展示するのが博物館の仕事。集めるのは有形のものだけでなく、無形のものも。かつて伊勢湾はどうであったのかと語る漁業者の声もモノだ。

○三重県内の海のある市町村からモノは次々集まってくる。海女と船は県外資料も受け付ける。置き場が大変、整理するのが大変。困っている。一部は外に置いている。三重大学の学生が学芸員実習に来たときにモノを整理して、展示している。

○「箱モノがダメだ」というが、箱がないとモノを入れる場所はない。つまり箱をつくるからダメなので、箱が悪いわけではない。箱は必要。

○博物館の開館にあわせて、「海を守る」(Save Our Sea: SOS)運動を始めた。合成洗剤撤廃運動もずいぶんやった。原発立地反対運動もやった。当初、公害は直接被害を受ける形で出てきた。被害が目に見えた。だから運動も進んだ。合成洗剤もいくつかの漁村で撤廃させた。しかし今、海を守る運動はやりにくい。盛り上がらない。見えないから分からない。人間にはつきり傷がつかないから。「いい洗剤を出した」とのメーカーからの巻き返しもあり、合成洗剤撤廃運動も難しい。なかなか見えないけれども、博物館ではモノを通して見えるようにしている。

○今もっと深刻なのは、子どもが海離れしていること。学校教育の中でも海は外されてきた。ようやく海洋基本法で海洋教育の必要性がうたわれたが、海水がしょっぱいというのを知らない子がいる。映画を見せて観点的に海が大事だといってもダメだ。小学生を一人でもたくさん海にふれさせることを、海の博物館では取り組んでいる。小さい頃の体験に根ざした直感的に得たものは大切。

○「海の博物館」の考え方の根底には、石原館長の父であり、元衆議院議員・石原円吉さん(自由党)の存在がある。



インタビューを終えて。石原館長



←「資料の多様性」と「モノが資料になるまでの行程」をテーマに、三重大の博物館学芸員実習生が取り組んだ展示。

「博物館へは、1年に数百点から数千点の資料が持ち込まれます。『海の博物館』では持ち込まれた資料を、余程のことがない限りすべて『収蔵保存』する方向で対応しています。…様々なものが混在していました。しかし、まるでゴミにしか見えないものであっても、どれもこれも貴重な資料なのです。…『生活の痕跡』を感じ取ってください」

(展示説明より)



←重要有形民俗文化財収蔵庫

国の重要有形民俗文化財に指定された「伊勢湾・志摩半島・熊野灘の漁撈(ぎょう)道具」6,879点を保存するために建てられた収蔵庫で、日本でも最大規模。

現在、三重県と日本各地の木造船約80隻が収蔵されている



←2009年10月3日に開催された「日本列島“海女さん”大集合～海女フォーラム～」

岩手県久慈市から熊本県天草市まで、国内10地域と韓国・済州島の海女計64人を含む210人余りが参加し、会場は立ち見も出る大盛況。全国で海女漁に従事する女性は約2千人。うち1千人を三重の伊勢志摩地方が占める